

ヨーロッパレポート



滝沢 鉄男

去る11月3日より9日にかけて、ドイツ、スイスの2ヶ国を巡る、西蒲三村合同による欧州視察旅行に参加させて頂きました。今回の視察では、フランクフルトのゴミのリサイクル処理について、ミュンヘンの小学校では教育制度について、ジュネーブでは福祉国家のあり方について研修を行ってきました。

ドイツに着いて2日目、ハイベルベルクへ向けて、バスは走り出した。途中アウトバーンと呼ばれるドイツの高速道路に乗りました。このアウトバーンは、速度無制限、料金所無し、ドイツが世界に誇る高速道路だ。150km/h〜200km/hは当たり前この道、最近ではスピードの出過ぎによる交通事故の多発、排ガ

ス公害による森林破壊やオゾン層の破壊などを少しでも減らさせるため、全面的にアウトバーン内での車のスピードは落ちてきているそうです。安全のため、バスは100km/h、普通車は130km/hの推奨速度が設定されているそうです。しかし、我らの乗ったバスを左側から猛スピードで追い越していき車は、どう見ても200km/h近く出している様で、あつ、という間に見えなくなる。これがドイツの車の性能に寄与している原因だと思った。

ハイデルベルク城では、世界一のワインの大樽(約22万ℓ入)など見学した。次に最初の研修場所のフランクフルト市営のゴミ焼却場を訪れ、ゴミのリサイクル処理について、職員の方より説明を受けた。ドイツでは、家庭や工場から出るゴミを細かく分別、分類して、リサイクルできる物、できない物に分けて回収し、ガラスなどは色別に3種類に分けて回収したり、生ゴミは別処理して肥料にする。

と、言うようにリサイクルしているそうです。又、ドイツの自動車業界は、自分の売った車については、その車が使われなくなったら、無償で引き取らなければならない法律があり、その集めた車の部品をリサイクルし、次の車を作る時の部品の一部として使っているそうです。この事からもドイツ人の物に対する考え方については、日本人もつと見習わなければいけないと思いました。

その夜は、ローテンブルグでの宿泊でした。この町は、17世紀から町の形を変えていない事で有名です。泊まったホテルはとても古く、今にもおぼけが出てきそうな雰囲気。しかしその夜は、すぐに寝てしまい、おぼけは見ずじまい。翌朝6:00に起きて町の探索に出かけに行く。1時間おきに鳴り響く教会の鐘の音、今思うと5日間の中で、一番ヨーロッパを感じた一時だったと思います。

3日目は、ロマンチック街道を南下し、ノイシュヴァンシュタイン城(白鳥城)を見学し、ビールにて有名なミュンヘンへ。今回の旅では一番のナイトスポット、さつそく町で有名なホーフブローイハウスというビアガーデンへと。その店はとても広く、客はみんな大ジョッキ(2ℓ入)のビールを3〜4杯ぐらいをつまみ頼まず飲んで楽しんでいました。

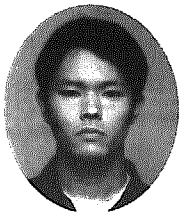
4日目は、ミュンヘンの小学校へ行き、その校長先生より、ドイツの教育制度について説明してもらいました。ドイツでは、小学校の段階で国語と算数の成績が悪いと進級できなく、小学校4年生で大学に進学するかを決めなければならないそうです。大学はすべて国立、入学試験や授業料は無いが、工学部などは100人中3人ぐらいしか卒業できないそうです。今、日本でも問題になっている「いじめ」や「登校拒否」はドイツでは全くないと言っていました。この日、ドイツよりスイスへ移動する。

5日目は、ジュネーブの老人ホームを見学し、そこで今のスイスの福祉の現状についての説明を聞きました。私の妻も老人福祉の仕事をしていて感じたのは、やはり施設が広くまた設備も非常に整っていたことである。ここはその地区でも大きい方の施設であるとは聞いたのだが、我が国のいくらか大きい老人ホームを見ても歯の治療の設備まである所はまずないだろう。またもう一つ驚いたのは職員一人が何人かの面倒を見なくてはならない状況であるが、ここでは入居者と同じくらしい職員が働いているそうである。やはりこの点が最も日本と違いを感じたところだ。

入居者の部屋はきちんと割り振られていて、個々のプライバシーもしっかり尊重されているようであった。またいろいろな所で仕事をされていた職員の方々がたまたま通りかかった老人に笑顔で挨拶を交わし、軽く言葉をかけて姿はとても印象に残っている。

このように福祉の発達した所では、環境設備の整備とともに入居者の方に不安を与えずに安心して過ごしてもらうために人格的(精神的)な面でのケアに非常に力を入れていることを実感した。今年には月瀧村にも保健福祉センターがオープンし、老人福祉制度は市町村単位で次々と発達してきていて、日本も決して遅れているわけではないのだが、先にも書いたように我が国の高齢化は急速に進んでいるため、より迅速な措置が必要であるだろう。また我が国の総人口は平成23(2011)年に1億3,044万人とピークを迎えた後、減少に転じるが、高齢人口比は同年の21.4%からさらに上昇を続け、平成37(2025)年には25.8%に達するものと見込まれている。この要因は、日本の経済・社会の急速な発展の中で衛生水準や生活水準が大幅に向上したことで平均寿命が大幅に伸びたこと、出生率が低下し少産少死時代を迎えたこと、さらに戦後のベビーブーム世代(団塊の世代)が高齢期を迎えることなどによるものである。このように我が国は21世紀には未曾有の超高齢社会を迎えることとなる。高齢者が地域家庭で生を全うできるようにすることを目標にさらなる対策が必要であるだろう。以上での研修の報告を終わりにするが、私もここで学んだことを将来何かの形で役に立てることができたらと思う。

研修報告



中嶋 剛志

今回の三村合同海外研修はドイツとスイスへの視察となった。研修の内容はドイツの小学校とゴミ工場、スイスの老人ホームへの訪問の3つであった。新潟から出発し、到着までは一日かかる道程を含め、わずか一週間の旅程で公式視察が三日間もあるという大変忙しい旅行であった。しかし普段なら日本でも見る機会の少ないこれらの施設を見学することができ、とてもよい勉強となった。

この研修の中で最も興味があったのが老人ホームへの訪問であったので、スイスの老人福祉について研修の結果を報告したい。興味があるといっても特別に福祉についての勉強をしているわけではないが、老後のことは誰もが必ず考える必要ならぬ問題であるからだ。またそうい

った個人レベルでなくとも、日本の現状を見れば高齢化が諸外国に例を見ない速さ(高齢人口(65歳以上)比率が7%から14%に上昇するまでの期間がフランスの130年、スウェーデンの85年に対し、日本は25年)で進行しており、社会保障と環境整備の不備はもちろん、国民全体の意識・価値観の変革や社会・経済のシステムの改革に許される時間が極めて短いことが大きな問題となっているためやはり全ての人が関心を持たなくてはならない問題のはずである。

西欧諸国は福祉制度が充実しているというのは衆知の事実であり、もちろんスイスもその中の一である。この老人ホームを説明されていた方によると、ヨーロッパでは家族による介護(同居)比率が日本と比べ相対的に低く、核家族世帯や単独世帯の割合が多いため、このように福祉制度が整備されてきたらしいが、我が国も急速に同じ傾向となつていくため、やはり早急な対策が必要であるだろう。今回見学した老人ホームを

素人の目で見て客観的にまず感じたのは、やはり施設が広くまた設備も非常に整っていたことである。ここはその地区でも大きい方の施設であるとは聞いたのだが、我が国のいくらか大きい老人ホームを見ても歯の治療の設備まである所はまずないだろう。またもう一つ驚いたのは職員一人が何人かの面倒を見なくてはならない状況であるが、ここでは入居者と同じくらしい職員が働いているそうである。やはりこの点が最も日本と違いを感じたところだ。

また食堂ではビールを飲むこともできるようであったし、ベランダを利用した場所など入居者の人が憩いの場所となるような所がいくつもあつたのは関心すべきことだと思ふ。また老人達が職員と一緒にになってお菓子を作っているところを見せてもらったが、穏やかな雰囲気皆が楽しそうにしているのを見て、このようになちよつとしたイベントを催すことなども限られた場所で行う必要があるのである



今年には月瀧村にも保健福祉センターがオープンし、老人福祉制度は市町村単位で次々と発達してきていて、日本も決して遅れているわけではないのだが、先にも書いたように我が国の高齢化は急速に進んでいるため、より迅速な措置が必要であるだろう。また我が国の総人口は平成23(2011)年に1億3,044万人とピークを迎えた後、減少に転じるが、高齢人口比は同年の21.4%からさらに上昇を続け、平成37(2025)年には25.8%に達するものと見込まれている。この要因は、日本の経済・社会の急速な発展の中で衛生水準や生活水準が大幅に向上したことで平均寿命が大幅に伸びたこと、出生率が低下し少産少死時代を迎えたこと、さらに戦後のベビーブーム世代(団塊の世代)が高齢期を迎えることなどによるものである。このように我が国は21世紀には未曾有の超高齢社会を迎えることとなる。高齢者が地域家庭で生を全うできるようにすることを目標にさらなる対策が必要であるだろう。以上での研修の報告を終わりにするが、私もここで学んだことを将来何かの形で役に立てることができたらと思う。